

〔書評〕

田中章夫著

## 『東京語——その成立と展開——』

山の手育ちで、下町系のことばを話す——これが著者田中章夫氏の自画像である。こうした生まれ育ちは、東京語研究者として、やはり一つの強味になっているようだ。この本の中でも、自分の経験や内省が、随所に生かされている。

田中章夫氏の著書としては、『国語語彙論』の方が先に世に出たが、氏のもともとの出発点は、江戸語東京語の研究であった。「近代東京語の命令表現の通時的考察」(国語と国文学。昭和三二年五月)が、私の記憶に誤りがなければ、氏の最初の論文である。最近この論文を読み返す機会があったが、三十年近くも昔の論文とは思えないほど新鮮、かつ明快であった。これは氏の明晰な分析力、見通しの上さによるところが多いだろう。

ところで、本書執筆の動機について、著者自身、「一つぐらい『東京語概説』といったものがあってもよからう、これが本書を書き始めた動機である」と説明し、更に「江戸語からの発展過程も含めた東京語のプロフィールを描くことをねらいとした」という。即ち、本書は東京人の書いた、江戸語からの発展過程を含む東京語の概説書である。

このような仕事をするとして、おそらく田中氏ほど適任な人は

小松 寿雄

いないであろう。先に触れたような見通しの上さや明快さは概説書を書く必須の資格であるし、氏は江戸語にも東京語にも、通曉している。事実、氏はこの仕事を、先行研究を巧みに利用しながら、見事になしとげたといつてよいだろう。

本書の読みどころの一つは、引用の多さである。もちろん、引用は多ければよいというものではない。適切で、その上面白ければ、なおよい。本書の引用には、硬軟両面がある。柔かい方は小説、新聞、雑誌などの引用である。硬い方は先行の研究論文や調査データなどである。この本の引用は、これら硬軟両面にわたってほぼ成功している。各節の冒頭は、たいてい柔かい方の引用で始まる。こうした引用は読みやすく読者を本文の中に誘いこむ効果ばかりでなく、たとえば下町言葉なら、その雰囲気や自然に伝えてくれる。引用の範囲は、長崎県の公立高校の入学試験に及ぶ程であるが、これはいささか御愛嬌にしても、有益で面白いものがたくさんある。私事で恐縮だが、「昔は為永派の人情本にて読み覚えし東京言葉も今は傍訓新聞にて読み覚ゆる」(明治一八年六月三〇日発行の新聞「自由灯」)などでは、人情本の言葉の説明にすぐにも借用したくなる。硬い方の引用、即ち論文、データなどの引用も実に広

く行き届いている。この引用だけでも、私は本書をそなえておきたい。少し注文をつけると、出典を示す注の位置に必ずしも適切でないものがある（たとえば、165ページの注36など）。また、179ページ「表5-1」では、小島俊夫氏の原因を一部省略してしまったので、A<sub>1</sub>等の段階の意味が分からなくなっている。再版の折にでも検討し直してほしい。

この辺で内容の紹介に移る。まず、目次を掲げよう。

### 第一章 東京語の位置

- 一 関東方言と東京語
- 二 東日本方言と東京語
- 三 東京語の周辺

### 第二章 東京語の性格

- 一 東京方言としての性格
- 二 公用語としての性格
- 三 都会語としての性格

### 第三章 東京語の展開

- 一 標準語の形成
- 二 文章語の問題
- 三 三文文一致と東京語
- 四 東京語と標準語
- 五 東京語の普及

### 第四章 山の手ことば・下町ことば

- 一 下町ことばの特色
- 二 下町ことばの衰退
- 三 山の手ことばの台頭

- 四 山の手ことばの形成
- 五 明治初期の東京語
- 第五章 江戸語の諸相

- 一 武家のことば
- 二 町人のことば
- 三 六方ことば
- 四 遊里のことば
- 五 談義のことば

### 第六章 江戸語の形成

- 一 江戸語の母胎
- 二 上方語の影響
- 三 江戸語の成立
- 四 江戸語の成熟

### 第七章 東京語観の種々相

- 一 江戸語から東京語へ
- 二 方言との交渉
- 三 東京語意識
- 四 対東京語意識
- 五 東京語観の視点

しばらく、各章の内容を紹介していこう。第一章では、言語の島としての東京語の位置が、多くの研究成果を利用して、明らかにされる。東京語は、基本的には東日本方言の諸々の特徴をそなえた言語であるが、非東日本方言、特に関西方言との共通性が強い。その代表的なものは、敬語表現で、東京語の敬語表現は関西の出店だ、という。東京語の行われている範囲は、次のようにまとめられる。

南は横浜・横須賀あたりまで、西は立川・八王子辺りまで、埼玉県側は大宮の市街地まで、東は江戸川を越えるか越えないかの程度まで東京語圏にくり入れられている。本章、特に「一」と「三」は、第六章と呼応する。関東方言は、江戸語形成の母胎の一つになったはずであるが、当時の周辺の言語については、何分よく分からない。この点で、現代の周辺の状況は、一つの参考となりうる。たとえば、本書で、東日本方言としてたびたびとりあげられるデカイは、江戸者の言葉には殆ど用いられない。一方、オオキイはいくらでも見つけることができる。明和の洒落本あたりまでさかのぼっても、そうであるから、後期江戸語では、すでに上方語的なオオキイになっただけで済んでしまったと思われる。ところが、同じく第一章の17ページに触れられている東北から関東にかけて認められるイグ（行く）のようなものはどうかという点、むしろ、これは現代東京語では使われないものであるが、明和の頃までさかのぼれば、江戸者の使用例を見つけることができる（明和八年の洒落本「快者方言」。洒落本大成五、203ページ上段1行ほか）。このようなイグは、第六章に引用されているように（277ページ）、三馬によって江戸訛から区別されて、関東訛とされてしまう。第一章と第六章を重ね読みすることで、江戸語形成の諸相が浮かびあがってくるのである。

第二章は、東京語の捉え方、それによって捉えられた東京語の姿を描く。氏によれば、東京語には三つの顔がある。一つめは東京方言、二つめは都会語（植民地語）、三つめは公用語としての顔である。東京方言は、東京人の日常語で、各地の方言に当たるとしての東京語とは、全国各地の移入者が東京語に持ち込んだものである。公用語としての東京語は、日本の標準語を目ざして、かな

り意識的に手を加え続けられた面である。東京方言の中の、独得の言いまわしや発音の訛を東京弁というが、東京弁の例として、次のようなものが示される。即ち、*しチャウ*、*しジャンイ*、念押しでの*シヨ*、提題の*しナンカ*、*ダッタラ*、*トカナン*トカ、文末の*サ・ヨ・ヤ・ゼ・ノ・テ・ワヨ・イ・モンネ*。また、発音の訛としては、二重母音の長音化。これらは、各項を個々に見れば、他の方言にも認められるが、全体として並び行われているところに、東京方言の姿がある。公用語としての東京語は、学校教育や放送を通じて絶えず人為的な矯正、純化がほどこされる。また、現代口語文の地下として安定性を求められるため、自然の変化が抑えられることもある（これを氏は「東京語の宿命」A314ページVとみる）。公用語としての性格は、次のような点に見られる。即ち、外国語の影響を受けやすいこと、客観的事務的性格、論理的表現、敬語の発達、その中でも公用語としての敬語の発達（不特定多数を相手とする敬語、パターン化した敬語）などである。都会語としての性格には、地方からの移入語の多さがある。中でも関西から多いのは、昔も今も変わらない。非関西的な流入例としては、*トテモ*、*ダツケ・タツケ*、終助詞ネがある。また、流入表現と在来東京語の結合した形として、*行カケリヤナラン*、*行カクチャイカン*、*行カントイケナイ*のような混血児的表現も出来あがった。因みに言えば、『南閩雑話』（安永2）に「たいくつな。物じゃっケ」（洒落本大成六、49ページ下段8行）という、奇妙な形があるが、これも断定のチャに回想の「ケ」がついた混血児であろう。東京語を考察するに当たっては、単に日常語としての東京方言を問題にするだけでは足りないのであって、右のような複眼的な捉え方が必要である。先行の研究を広く利用しながら

ら、三つの側面を通して東京語の性格を具体的に描いた章である。

第三章では、東京語の発展に最も大きな影響を与えたものとして、標準語化を挙げ、その関連で文章語を問題にする。明治の前半期、今日の標準語に近い言葉がかなりの程度形成され、明治三十年代にはほぼ完成する。その普及には、標準語教育、特に大正一四年放送開始のラジオの力が大きい。標準語に最も近い言葉は東京の山の言葉であるが、標準語の「文字化すれば文章になりうる」という性格を重視すると、標準語と山の言葉との関係は薄くなる。田中氏は、森岡健二氏の説を援用しながら、一对多の場面での言語を記録した江戸講義物、明治講義物、演説の系譜上に標準語を置く。

標準語と東京語の間にはずれがあるが、東京語はやはり標準語のものとになっている。その東京語のゆれを扱うのが、本章の「四」である。「五」では、東京語の各地方言への浸透の結果、「東京語の独自性は、次第に薄れてきつ」あり、一方、各地の人々の言語生活は、東京語とかつてない大きなかわり合いを持つにいたった。これを近代日本語の特色の一つとして指摘する。

第四章では、山の手の言葉と下町の言葉の特色、山の手の言葉の形成、拾頭、それに伴う下町の言葉の衰退が述べられる。本章「一」は、下町の言葉の特色が多数挙げられていて、便利である。山の手の言葉の形成については、「原型は幕末期に形成され」(155ページ)、幕末の三〇年間はその揺籃期に当たるとする。明治後半期にはその勢力が伸長し、下町の言葉と東京語を二分する。大正のはじめ頃には、地域的にも階層的にも、両者の分布が定まって、関東大震災までの十年間、東京語は安定期を迎える(松村明氏によれば、これが東京語の完成期である)。

第五章では、江戸語の諸相を、「武家のことば」「町人のことば」

「六方のことば」「遊里のことば」「談義のことば」の五つの面から描く。武士の言葉の特色として、人称、敬語など語彙的なものほか、固苦しさ、古めかしさ、しかつめらしさ、格式ばった感じ、文語調、固い漢語などを挙げる。また、武家言葉の特色として、男女差を指摘する。男(武士)の言葉は古風で固いが、女性の言葉は「たいへん優雅」であると評する。けれども、町中に住む下級武士の言葉は、『夢酔独言』を引用しながら、格式ばったものでも、上品なものでもなかったという。ところで、この武家の言葉は、山の手の言葉には直接つながらず、お屋敷奉公等を通じて、武家の言葉を見習った町人層を通じて、山の手の言葉へ流れていった。即ち、山の手の言葉の源流を、天保期以降の上層町人の言葉に求める。この頃の上層町人社会には「敬語が整い、男性語の格調、女性語の気品を特色とする」、これまでとは異質な言葉が形成されていた。田中氏は、ここに山の手の言葉の源流を置く。

第六章では江戸語の形成を扱うが、これを人の面からみれば、徳川家臣団の存在が大きい。徳川家臣団は、いうまでもなく駿・遠・三の出身者が多い。ところで、これらの地方の言語には上方語の影響が濃い。これが後の江戸語の形成に重要な影響を与えた、という。江戸語には上方語の要素が多く含まれているが、それがどのような経路で入ってきたか、これまで十分考察されてきたとは言いがたい。田中氏のこの指摘は、上方語流入の有力なルートを明らかにしたものといえよう。江戸語は、このように上方語の色彩が強いが、明和頃にはそれを一往脱して、江戸語独自の性格を確立する(氏は、このあたりを江戸語の成立時期とするらしい)。化政・天保

期、江戸語は爛熟期を迎える。この頃、打消しが又系からナイ系へ移る。在来のウ・ヨウ・マイによる推量表現がダロウ系に変わる。伝聞のソウダがしゲナにとつてかわる。カモシレナイ・カシレナイ・モシレナイなどが進出する。ナイデハナラナイ、まれにナクテハナラナイという形も現れる、ダケシカナイもこの辺りから使われ始める。田中氏は、ここにも挙げたような複合辞（カモシレナイとかシナケレバナラナイのようなもの）の使用状況を巧みに利用して、論を進める。複合辞は、これまで軽視されがちなものであった。

第七章では、見レル、来レルのような可能表現にかなりのページをさく。この種の言い方は、東京語では語幹一音節の下一段動詞・可能動詞、あるいはサレルへの類推によって、まずレル型動詞の空白部を埋める形で成立した、という。見レル、来レルなどはいわば自然に生まれて来た言い方であるか、それが東京語でなかなか伸びられないのは、先述したような公用語としての性格を東京語が持っているからである、とする。以下、東京人の東京語意識、非東京人の対東京語意識などをとりあげている。

さて、これから書評めいたことを幾らか述べるが、多く解釈の相違であつて、あるいは著者自身先刻御承知のことかもしれない。一往本書は「概説書」のたてまえをとっており、東京人らしい軽妙さで、あえて書かなかつたような事柄とも思える。しかし野暮を覚悟で、二三の点に触れておきたい。

まず、山の手の言葉の成立に関して。既に紹介したように、田中氏は山の手の言葉の原型は幕末に成立し、その担い手は江戸の上層町人であつた、という。山の手の言葉と下町の言葉の相違については、安政以降成立の『江戸自慢』にも「赤坂、四ッ谷、市谷、牛込、

小石川等八坂道多き故、山の手と唱ふ、江戸内二而も田舎めきて、下町辺とハ言語も少し違ひたる様ニ言へど、我等ニハべんじがたし」(未刊隨筆百種八。50ページ)とあり、何らかの相違がすでに生じていたらしい。ただ、ここでいう相違がどのようなものであつたか、『江戸自慢』は何も言っていない。田中氏は本書148ページ以下で語法上の特色、連母音訛の少なさを挙げて、これが山の手の言葉につながるのとされる。しかし、ここに挙げられた語法上の特色は、江戸上層町人だけのものではなく、将来下町の言葉の担い手になっていく他の階層の人々にも共通に見られるものであろう。ナンダーナカッタの変化、マセンデシタ・デス・デシヨウ・ナイデシヨウ、提題のツテ、ダケシカなど、だいたいいずれも下町の言葉に受け継がれたと思う。連母音の音訛(ナイがネーになるような変化)の減少も上層町人に限らなかつただろう。下町の言葉も化政期に比べれば、連母音の音訛を減少させていった面がある。たとえば、「浮雲」のお政(小川町居住)の言葉などがそうである。本書に挙げられた江戸上層町人の言葉の特色は、下町にも伝えられており、山の手言葉の特色形成の由来を説くには、十分とは言えない。

次に、山の手の言葉の形成の担い手から武家を除外する点について。最初に表現上の問題であるが、幕末にその原型ができたとする、この際武家はまた健在であり、この原型の形成に関しては、武家は直接かかわりがあつたと言える。大きな問題は、この原型を明治の山の手の言葉につないでいった人の中に武家を含めるか、どうかであろう。ここから武家を排除する有力な根拠は、維新による江戸武家社会の崩壊である。氏は『仮名文章娘節用』のお雪の言葉に山の手の手霧困気を濃厚にかぎとりながら、「明治初期の武家社会の崩

壞・四散」を理由に、山の手の言葉とのつながりを否定する。この辺りの史実に疎いので不用意な発言になるかもしれないが、維新後の東京に江戸語を話す武家が全くいなくなったとは思われない。『近代日本総合年表』によれば、明治二年家達に従って静岡へ移住した旧幕臣は六五七二世帯だという。おそらく三万人を超える人数であろう。

しかし、旧幕臣全体から見れば、一部のものである。また、家達自身は明治四年に帰京している。即ち、この年廢藩置県に伴って旧藩主は知藩事を免ぜられ、東京府貴属となり、東京移住を命ぜられる。同時に華族の称号を許され、三百以上の旧藩主とその子女が東京に集まり、華族社会を形成してゆくのである（彼らの大部分は「正銘の江戸言葉」の話し手であった）。また、旧幕中の江戸語の話し手の中には定府の武士及びその家族も多数おり、これらがすべて江戸を退去して帰って来なかったとは言えない。新しい知識人の中には武家出身の者が多く、武家言葉の全国公用語的性格を考慮すれば、これらの人の言葉の影響も無視できない。武家の言葉と山の手の言葉の直接のつながりを、一切排除することには、以上のような疑問が残る。

遊女語の一般語への影響について。田中氏は、第六章の「四」で遊女語の一般語への影響を述べ、その影響力を重視する。しかし、前期上方語の場合に比べれば、後期江戸語に対する遊女語の影響は少なかったのではないかと思う。これにはいろいろな理由が考えられるが、一つには江戸にはお屋敷言葉という言葉の根本があったので、遊女語の流入がさまたげられたのであろう。江戸語のデゴザンズなどは遊女語と形も同じであり、遊女語の影響とみられそうであるが、一般的に言うならば形の一致だけで遊女語とするのは、危険である。たとえば、昭和のザアマス、ダンスなどが遊女語から来たとは

いえないように。デゴザンズなどは、デゴザイマスから自然の変化として生じやすい。以上、遊女語の影響を、遊女だけが用いる語彙に限定してきたが、実は田中氏はこれとは少し別の観点に立っている。即ち遊女の言葉の特色的部分だけでなく、遊女の言葉全体を扱って、上方語系の遊女の言葉が江戸語に影響を与えた、とする。上方語の新しい流入源を提出した点では、評価しなければならぬだろう。

六方詞について。田中氏は、男だての六方詞と後期の俠者（きゃん、きおい、いさみ）や下層町人の言葉との連続を認める。この連続は、むしろ一般的な見方かもしれないが、言葉の上でどれくらい検証できるか、実は疑問である。両者ともに撥音、促音を含んだ接頭語が多いけれども、ヒッパルとかツンノメルとかいうようなものは、古来、あるいは上方語にもあるもので、六方詞や俠者・江戸下層民の言葉に限らない。いかにも六方詞らしいヒッ噛ム、ノッチメル、カンナグル、クン飲ム、ヒンノセルなどは、洒落本の俠者の言葉には出てこない。六方詞で自立つ「事だ」の意のコンダも、後期江戸語ではコッタに変わる。ナダ（涙）のような省略形、「血目玉」「火事の玉子」のような誇大表現も姿を消す。

以上述べてきたように、この本は決して「東京語概説」にとどまるものではなく、江戸語東京語の研究にとつて、きわめて刺戟的な本である。読了して、啓発された点が多々ある。にもかかわらず、評者の一方的な妄言が多かったのではないかとおそれている。ひとえに御海容を願いたい。

（昭和五十八年十一月三十日 明治書院刊 A5版 三六四ページ  
五二〇〇頁）

——埼玉大学教授——

（昭和五十九年十二月二十九日 受理）